

## 廃棄物を燃やしたらアカン！資源やで！

明石市が進めている「新ごみ処理施設」の整備計画は、循環型社会をめざす世界と日本の方向性に逆行しているのではないか？という疑問の声は、2月23日に開催した報告討論集会でもひと際高まりました。3月市議会では810億円に上る巨額の事業費が突っ込んだ議論もなく承認され、事業者選定の作業が進められています。加えて、形だけの「指定ごみ袋」の導入で

本格的なごみ減量への取り組みは先延ばしされようとしています。

こうした動きを検証し、いま市民はどのような道筋を選択するべきなのか。6月1日の2回目の報告・討論集会は、3つの報告と問題提起をもとに議論を深めます。多数のご参加をお待ちします。資料代300円。主催は新ごみ処理施設を考える会。市民自治あかしが共催。

### 循環型社会への対応と新ごみ処理施設を考える「報告と討論」の集い

6月1日(日) 13:30~16:30 アスパア明石8階 市民活動センター

#### ■報告と提案

- (1) 循環型社会の形成と明石市の新ごみ処理施設
- (2) 形ばかりの「指定ごみ袋」導入よりも、ホンモノの分別・減量施策へ
- (3) 新ごみ処理施設をめぐる3月以降の動きと今後の対応

#### ■質疑と意見交換

## 環境省へ交付金の条件や手続きと現状について質問書提出

### 明石市の「新ごみ処理施設」整備事業に対する「資源循環型社会形成推進交付金」

明石市は2025年度当初予算に新ごみ処理施設整備事業費として施設整備費493億円と20年間の運営委託費317億円を計上し、うち施設整備費には国の「資源循環型社会形成推進交付金」142億円を見込み、財源として充当するとしています。

しかし、新ごみ処理施設を考える会の解釈では「明石市資源循環型社会形成推進地域計画」の2022年12月変更計画時点と変わらない姿勢と計画では、交付金支給条件のハードルが上がっている「資源循環型社会形成推進交付金」の適用条件には達しないと見ていますが、果たして同交付金の給付が来年春までに「見込み」から「確定」に進展するのでしょうか、気がかりです。交付金適用条件について、別の解釈等があるのかどうか等について、解釈を含めて所管の環境省に4月17日質問書を提出しました。

#### 環境省への質問の内容

①明石市から新たな「明石市資源循環型社会形成推進地域計画」は、すでに提出されているのか？ その変更内容に基づき「資源循環型社会形成推進交付金」交付は可能になったのか？

②明石市から新たな「明石市資源循環型社会形成推進地域計画」はまだ提出されていないが、変更内容について市から報告や説明等があり「資源循環型社会形成推進交付金」の交付が可能と回答されたのかどうか？

# 旧・明石市立図書館跡の再整備 「解体ありき」でいいのか？

## 解体・新設の利活用計画の経緯と空疎な計画案を検証しよう

県立明石公園のシンボルの一つとして、緑豊かな公園環境に溶け込んできたレンガタイル造りの文化施設。兵庫県立図書館と明石市立図書館はそろって昨年10月、開館50周年を迎えた。いや正確に言えば、50周年を祝ったのは県立図書館だけで、市の施設は“空き家”のまま放置されている。

市立図書館は2017年1月に明石駅前再開発ビルに移転したあと暫定利用期間を経て2020年3月から“空き家”になっている。同じ時期に一体的にデザインし設計されて開館した図書館が、なぜ対照的な運命に置かれているのか？そして今、明石市は旧図書館を解体し、更地にしたいうえで「新しい施設」を建設しようとする計画を進めている。

### 文化行政の欠如と場当たりの対応

こうした展開になった理由は、短期的にはここ数年の明石市と兵庫県の一時的な“確執”から生じたものだが、もう少し長い目で見ると明石市政の文化行政、とりわけ図書館行政への立ち遅れと場当たりの対応が連続と続いてきたことにある。その体質は、由緒ある建築物へのこだわりも配慮もなく、いま「解体ありき」の対応を続ける市政の体質に引き継がれているのではないかと懸念される。

いま明石市が進めている「旧図書館の解体、利活用計画」が、いかに誤った道筋に踏み込んでいるかを、こうした経過と背景、市政の体質から再検証し、いま一度「解体ありき」を見直し、原点に立ち戻ることを提言する。

市が進めようとしている計画には、市議会からの大きな異論の声が繰り返し挙がっており、市の計画には“無理筋”を押し通そうとして計画変更や補助金の壁に直面している状況が垣間見える。明石市の「文化行政百年の計」を誤らない方向に導くためにも、近い将来表面化する財政窮迫の要因をつくることを避けるためにも、市行政と議会、市民が今一度この計画を見直すことを求めたい。

### 2つの図書館は“一体建築物” 一方の解体で歪な建築空間に警鐘

昨年4月20日、市民自治あかしが開いた第43回市民まちづくり講座で「旧・市立図書館の保存と活用を探る」と題した提案と市民討議が行われた。2つの図書館建設をめぐる経緯を検証し、この2つの図書館の基本設計、実施設計と工事監理を担当した建築家の竹山清明氏（当時は兵庫県建築部営繕課の技師）が、建設当時のコンセプトや公共建築物としての価値、これからのあり方について具体的に提案した。

2つの図書館を一体として建築された経緯もあり、一方を解体してしまうと“いびつな建築空間”になってしまうとも警鐘を鳴らした。

兵庫県は市立図書館が新築移転する計画が進む中で2016年から2年かけて、県立図書館の耐震補強と全面改修工事を行った。昨年3月市議会では「耐震補強と改修工事県立図書館と一体として活用すべきだ」と提案され、市の翻意を促した。丸谷市長は「経緯から解体を前提にして進めているが、提案が可能かどうか考えたい」と答弁したものの、検討結果は明らかされないまま、解体ありきの計画が進んでいる。

＜この検証記事は市民自治あかしのHPで連載します＞



#### 図書館を設計した建築家・竹山清明氏

緑豊かな明石公園内に建設するため、建物が突出せず緑の中に溶け込むよう当初は中庭を中心に建物を段々状に配置して、屋根に植栽を施し小山のような景観を生み出そうとした。さまざまな意見が出る中で、最終的には現在のような建築になったが、2つの図書館を一体的な建築として公園の景観に溶け込ますコンセプトは維持された。

半世紀も経た公共文化施設は地域のシンボル、誇りとして大切にしていけることがSDGs時代にはふさわしい。